

船井情報科学振興財団奨学生レポート/第五回

2021年6月

Department of Economics, Princeton University 山岸 敦

経済学の Ph.D. 2 年次は、field course と呼ばれる専門分野に関する包括的な授業を履修し、それらに関しての試験 (qualifying exam) に合格することが求められることが通常です。この試験はしくじると強制退学が間近に迫ってしまう非常にストレスのかかる試験でしたが、幸いすべての qualifying exam に無事に合格し、「教えることは教えたからあとはがんばって博士論文書いてね」という段階に移ることができました。ここからが本番かつ長丁場となるわけで、精一杯頑張っ研究に打ち込んでいこうと思っています。

さて、この大学院 2 年目の過ごし方は日本の経済学の大学院 (修士 2 年次) とアメリカのそれとで大きく異なるところです。一般に、アメリカの大学院は 2 年目の授業 (field course) の量が多く専門分野全般の学習に専念するのに対し、日本では授業は最小限である代わりに修士論文執筆を要求され、さっそく研究に取り掛かるという違いがあるように思います。アメリカの field course の充実ぶりは多くの経済学徒が米国留学を行う理由の 1 つに挙げており、実際に自分もその 1 人でした。

そこで今回は field course について、自分の正直な感想を書きたいと思います。特に、自分がかつて留学せず日本で博士を取ろうとしていた経験から、「field course のような勉強はそもそも必要だと思ったか?」、「field course の実態はどうか?」、「field course のような勉強は日本の大学院でも可能か?」といった観点から書いていくことで、留学を検討しているが迷っている方への 1 つの判断材料を提供できればと思っています。

Field course 的勉強はなぜ必要か?

ここでは、field course 的勉強の定義は「経済学の個別領域 (例えば公共経済学、国際貿易など) について、分野全般に関する古典研究 + フロンティア付近の知識を習得する」という風に定義しておきます。例えば国際貿易で言えば、リカードの貿易理論、クルーグマンの新貿易理論といった古典中の古典を押さえたうえで、より現代的な古典論文 (例えば Eaton-Kortum 2002, Melitz 2003 など) についても勉強し、そのうえでさらに最近出版された論文についても何をやっているかの概要がつかめるようになる、というイメージです。

僕はこういう勉強自体については必要かつ重要だと思っています。理由はいくつかありますが、

1. 分野の古典的な重要論文に関する知識は自分が論文を書く上でも他人の論文を読むうえでも前提とされていることがあり、知らない困ることが多い
 2. 分野全般を俯瞰できる力をつけておくことで、自分の研究をより大きな視点から位置づけることができるようになる
 3. 最新の議論を幅広く知っておくことで、では次にどんな研究アイデアが出せそうか考える助けになるかもしれない
 4. 単純にある分野のエキスパートとして、その分野の全体像を知らないのはちょっと恥ずかしい
- …といったあたりが考えられると思います。以下、とりあえずこういう「御利益」はなんとか欲しいと

いう人向けに書きたいと思います。

Field course は field course 的勉強の目的を達成しているか？

では、実際にアメリカの field course はこういう御利益を本当にもたらしてくれるのでしょうか？

…Field course を実際に受講した正直な感想は、“Yes and No”だと思いました。もうすこしその真意をきちんと書くと、

- 上述のような目標を念頭に置いて構成された、熱心な field course の授業にしっかりとついていければ、実際に上述のような目標を非常に効率よく達成することができると思う（なので、“Yes”）
- ただ、現実問題としてそのような「良い授業」が常に提供されるとは限らない。正直、教授によってはイマイチやる気がなく解説や内容面に難があったり、自分が関心を持っている一部のトピックについてひたすら深掘りして話すだけだったりする。（そういう授業がまったく役に立たないとは言わないけれど、上述の目標から考えれば明らかに“No”）

といった具合です。要するに、（よく考えれば当たり前なのですが、）field course にも当たりはずれがあって、当たりを引けば上述のような素晴らしい御利益を体系立てた素晴らしい解説付きで短時間で達成できる最高の機会になるのに対して、外れを引いてしまうとイマイチ御利益の分からない授業内容を、万一失敗すると退学に追い込まれかねないテストのために必死に勉強するという非常にストレスたっぷりの状況になってしまうわけです。

この点は他の留学経験者が文章で指摘しているのを見たことがないのですが、個人的には留学のメリットを考える上で存外重要なポイントではないかと思いました。非常に悩ましい点として、留学前に各大学の field course の質を正確に知るのには難しいというのがあると思います。そもそも会ったこともない教授の授業の質を知るのには難しいです。そのうえ授業担当者は毎年変動することが常のため、留学前に自分は誰の授業を受講することになるのか見通すのは余計に難しく、さらに運要素を高めています。というわけで、field course はアメリカの Ph.D.課程の大きな魅力である一方、“field course ガチャ”状態になっている側面は正直あるのではないかと思いました。

では field course がない場合はどうなのか？

日本の修士 2 年次には、field course のような授業はないのが通常です（各先生方の尽力により、分野によっては field course 的な授業が開講されている大学もあります）。Field course がリスクーだとしたら、field course なんていっそない方がいいのでしょうか？

もちろんそうとは言い切れないと思います。確かに日本の場合は「しくじったら退学」というタイプの授業が 2 年生向けに課されることはほとんどなく、そもそも修論の兼ね合いで授業の要求量も少ないのが通例です。その意味で、仮に「外れ授業」があったとしてもその場合は出席をやめるなり適当に単位だけ取るなりの対応をすればよく、アメリカのようにどんなに外れの field course であれ必死に勉強しなければならないというリスクは小さいと思います。

ただ一方で、field course 的な勉強をすることによる御利益を忘れてはいけません。仮にこういう御利益が自分の研究人生の中で欲しい、と思うのであれば、field course がない中で何とかして似

たようなことを自習しないといけなくなります。

残念ながら良い教師がない状態での勉強は効率が落ちがちですし、そもそも僕も含め多くの人間の意志の力は弱く続けられないことも多いでしょう。それでも最近はインターネットの力によって、自習がしやすくなっていると思います。例えば、僕が東大の大学院にいたころにアメリカの公共経済学の field course のシラバスを収集し、そこでだいたいカバーされている重要論文を輪読する勉強会を開いたことがありました。その後アメリカで公共経済学の field course を実際に受講したわけですが、カバーされる内容はそれなりに似通ったものになっていて、自分がかつてやったやり方できちんと field course を（ある程度）代替しうるのではないかと思えました。また最近はオンライン授業が増えたことで多くの授業動画がアップロードされており、これらを活用することでより直接的に field course を代用できる可能性が高まっていると思います。

まとめ

ここまでで言いたかったことを箇条書きでまとめたいと思います：

- アメリカ式の field course は素晴らしい御利益がたくさんあると思う…理想状態においては。
- 実際に理想に近い素晴らしい授業をしてもらえることも多いが、「うーん…？」という授業もある。しかしそういう授業でも必死に試験勉強しないといけないので、その意味ではストレスかつ時間の無駄と言う側面もあるかもしれない。
- 日本ではそもそも field course がないことが多いのでこの手の問題は基本的にないが、それでも field course 的な勉強をしたい場合は自習しないといけない。

もちろん、仮にアメリカで外れ授業を引いたらって、頑張って自習すれば field course の御利益を得ることは可能でしょう。恐らく肝要なのは、「アメリカに行けば専門分野の知識を体系立ててぜんぶ教えてくれるから楽ちん！」などと思うことなく、日本にいたってアメリカにいたって、ストレスフルな試験勉強であれ自習であれ何らかの形での努力は必要になるだろうという覚悟をもつことではないかと思っています。そうすれば、留学への過度な幻想が留学後に打ち砕かれたり、日本に残って field course が無い不幸を呪ったり、そういうネガティブな心境に陥るリスクが減らせるのではないかと考えています。Field course のコンセプト自体は個人的にとっても素晴らしいと思っていますが、過度に期待しないで、やっぱり最後は自分の力で勉強しないといけないよね、という気持ちでいるのが安全かつ実態に近いのではないかな、ということです。（うーん、ちょっと夢とロマンがない結論になってしまいましたが…）

研究についての近況報告

”Minimum Wages and Housing Rents: Theory and Evidence”が Regional Science and Urban Economics という雑誌に無事に掲載されました。また、記事に関して東洋経済に解説を執筆するとともに、本論文に関して Next City というアメリカのメディアから取材を受けて記事にしてもらえました。それ以外にも Twitter 等でこの論文について議論している人たちが結構出てきてくれました。最低賃金引き上げがちょうど菅政権、バイデン政権でも議論されていたという背景もあり、アカデミア外への訴求という意味では、恐らく僕の今までの論文の中では最も成功できたと思います。

また、理科大の岸下さんとの共同研究である”Do Supermajority Rules Really Deter Extremism? The

Role of Electoral Competition”が Journal of Theoretical Politics から改訂要求を受けました。例えば日本では憲法改正には議会で 1/2 ではなく 2/3 の賛成が必要という「超過半数ルール」がありますが、こういうルールがある下での選挙戦についてゲーム理論で考察しています。この研究は東大時代に開始した中でまだ行先が決まっていない最後の論文になります (publish を当面諦めたプロジェクトは除いてですが…)。きっちり終わらせることが出来るように頑張りたいと思います。

また、理科大の岸下さんと同大学の松本朋子さんと共同で”Overconfidence, Income-Ability Gap, and Preferences for Income Equality”という新作論文を公開しました。

進行中の研究についてですが、現在もいくつかの新しい研究プロジェクトを走らせています。どれもデータの収集および予備的な分析に入りつつあります。こちらを夏休みから 3 年生の期間にかけてしっかり進めていきたいと思っています。

いつも末筆で恐縮ですが、船井財団の皆様のご支援のお陰で充実した留学生活を送らせていただいていることに感謝申し上げます。